

第 4 回 新採用教員研修会の開催 (11 月 28 日)

当センターでは、今年度より授業力向上を目指したワークショップ (90 分) を設け、新採用教員に加え希望参加の在職者を対象に実施しております。今回は、「学生の興味を喚起する授業デザイン」と題し、学習意欲の低い学生に対し、どのように学習動機を高めることができるのかを考える機会を設定しました。

第 4 回研修会 事後アンケート集計結果

	満足	やや満足	どちらでもない	やや不満	不満
Q1テーマ・内容	8	3	0	0	0
Q2講師の資料	11	0	0	0	0
Q3WSの活動	5	5	1	0	0
Q4期待した知識	5	5	1	0	0
Q5自己の収穫	9	2	0	0	0
Q6活用可能性	10	1	0	0	0

授業では学生に意欲的に参加してもらいたいものの、どこから手を付けて授業改善に向かえば良いのか、これはとくに授業経験の少ない教員には難しい問題です。当日は、映画「男はつらいよ」の映像なども織り込みながら、授業を構成する際に助けとなる「学習プロセス」の考え方や、授業デザイン上注意すべき要素、授業をデザインする上で有効な具体的ヒントなどを研修者が学び、シンク-ペア-シェアを基本に自己の授業の

振り返りと改善を図りました。当日は、新採用教員の他、在職教員、非常勤講師も含め、若手からベテランまで 11 名の先生方が参加し、活発な意見交換が行われました。

次回開催予定

第 5 回 「ルーブリック評価入門」

2 月 27 日 (火) 15:00 ~16:40

高大連携 連携高校教員本学訪問 授業公開・研究会 (11 月 29 日)

去る 11 月 29 日、企画入学課との連携事業として、協定高校教員による本学授業参観・授業研究会を開催しました。前号のセンターニュースでは本学教員による協定高校訪問授業参観を報告しましたが、本会においては、高校の先生方に大学での授業の実際を見ていただくこと、高大双方の教育活動や教育環境、生徒・学生の現在や学校を取り巻く環境などについて意見交換を図り、知識の交換をすることによって、高大間の指導内容や指導方法の乖離、高大における現在の教育環境を理解することを目的として掲げています。

高校側は相模原総合高校(伊原校長以下 9 名)、麻溝台高校(原田校長以下 4 名)、川崎工科高校(宍戸校長以下 4 名)、厚木北高校(神野教頭以下 3 名)、相模田名高校(堀校長以下 3 名)、神奈川総合産業高校(居石副校長以下 2 名)、麻生高校(米山校長)、生田東高校(東城校長)が参加しました。また、大学側では小宮学長を筆頭に、E 科中津原教授、下川教授、高取准教授、高橋准教授、C 科大庭准教授、R 科河原崎教授、H 科金井教授、黄教授、杉村准教授、K センター高橋教授、山本教授、師玉教授、土谷准教授、そして企画入学課石田部長、渡辺主幹、本センターからは井上、伊藤が参加しました。



当日は、2 グループに分かれ本学授業「微分積分学 I-c (土谷准教授)」「物理学ユニット (高橋教授代表)」「電気電子回路 II (黄教授)」「ヒューマンロボットインタラクション R (河原崎教授)」を参観しました。その後、高大教員 3 ~ 4 名ずつで 1 グループを作り、6 つの円卓にて研究協議を行いました。そこでは、「大学の授業」「本学の印象」「現在の高校生・大学生観」「指導方法」「アクティブ・ラーニング」「生徒・学生のコミュニケーション能力」「学びのグローバル化」「高校での進路指導」「大学入学前に身につけてほしいもの」など、大きく九つのテーマについて 70 分にわたり和やかなうちにも率直な意見交換が行われました。

報告 – 入学前教育・初年次教育調査について (1)

昨年10月に神奈川の県立高校10校のご協力をいただき入学前教育・初年次教育について調査を実施しましたので、2回にわたり概要を報告します。

1 調査の実施概要

- (1) 意図 18歳人口の継続的減少は大学入学の門戸を拡げ、入学者選抜方法の多様化もあって、高校生の「学力における中間層の勉強時間が最近15年間で約半分に減少」「(「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」2012.8) という状況に拍車をかけることが予想されます。本学の「考え、行動する人材の育成」の基盤としての入学前教育・初年次教育が、「大学教育の質向上」の観点からも重要性を増します。一方で高校の先生方にとっては、目的意識が稀薄で基礎学力が不足したまま大学に進学する生徒が増すことに危機感を抱いておられることと思われます。課題を共有し、協働して高校生を大学生へと育む上で、高校の先生方の意識を確認することをこの調査では意図しました。
- (2) 調査校10校 調査校10校は進学状況、学校行事、部活動状況等で4グループに区分できます。なお回答にあたって先生方には、現勤務校の状況にとらわれずこれまでの勤務経験などから思うままに答えていただきたい旨、校長を通じて依頼しました。

グループ	進学状況、一般・AO・推薦等	学校行事や部活動などの状況
Aグループ (1校)	進学校。生徒全員が大学進学（もしくは進学準備）。ほぼ全員がセンター試験を受験。	学校行事、部活動ともに生徒主体で活発に行われている。この学校では総合的な学習の時間で2年間をかけて課題設定からプレゼンテーションにいたる探究学習を行っている。
Bグループ (3校)	かつて学区が存在したときの学区上位校。一般受験が多いがAO、推薦がAグループより増える。	学校行事、部活動ともに生徒主体で活発に行われている。進学に向けての丁寧な指導やTOEICやGTECの全員受検などの対応を行う学校はこのグループに見られる傾向がある。
Cグループ (3校)	中堅校。大学進学者が多いが、専門学校との併願者もいる。進学はAO、推薦による者が多い。	学校行事や部活動はA、Bグループに準じるが、計画や運営面で教員に委ねられることが多くなる。本学志願者、入学者のボリュームゾーンとみなされるグループ。
Dグループ (3校)	大学進学者は少数。学校によるが、センター試験受験者が数人のところもある。進学はほぼAO、推薦。	学校行事は教師主導で実施。強力な指導者のもと成果をあげる部もあるが、部活動は全般的に低調。このグループの1校は総合学科高校（他の9校は普通科高校）。

- (3) 調査内容 先生方には6項目30問の選択式の問いに回答していただきました。この質問紙とは別に各校進路担当の先生を対象とした進路指導に係る調査を行いました。

内容・留意点など概要			
入学前教育	3項目15問	I 実施対象	II 期待できる効果 III 実施内容の適否
初年次教育	3項目15問	IV 必要性	V 期待できる効果 VI 実施内容の適否
回答の方法	問の文について次の1～4の選択肢から一つを選ぶ形式 1 思う 2 どちらかと言えば思う 3 どちらかと言えば思わない 4 思わない		
発問留意点	<ul style="list-style-type: none"> IIとV「期待できる効果」、IIIとVI「内容の適否」については、多くの回答者が1もしくは2を選ぶことが想定できる問いを並べて、その中で重要度の把握を図りました。 IIとVで同じ内容の問いを、IIIとVIで同じ内容の問いを設けて、高校の先生方の、入学前教育と初年次教育への意識や考えの違いの把握を図りました。 		
進路担当者対象の調査	<ul style="list-style-type: none"> 英語4技能検査に向けてのTOEICやGTECなど資格検定試験への勤務校の準備進捗状況 AO、推薦入試に学力検査が加味されることで生じる勤務校生徒の変化予想など 		

【質問と回答】

10校から237名の回答を得ました。各問の選択肢ごとに付した数値は%です。

1 思う 2 どちらかと言えば思う 3 どちらかと言えば思わない 4 思わない

I 入学前教育を実施すべき対象として、次の1~3はいかがですか。	1	2	3	4	1+2
1 AO入試合格者には入学前教育が必要だ。	80.2	14.3	2.1	3.4	94.5
2 推薦入試合格者には入学前教育が必要だ。	77.2	16.9	2.5	3.4	94.1
3 一般入試合格者（センター利用を含む）にも入学前教育が必要だ。	17.9	18.3	32.3	31.5	36.2
II 入学前教育に期待される効果について、次の1~7はいかがですか。	1	2	3	4	1+2
1 学習習慣、学習意欲の維持、向上に努める。	66.9	22.5	5.5	5.1	89.4
2 高校までの既習内容について復習し学力を補強する。	67.4	23.7	5.5	3.4	91.1
3 課題解決学習など学習形態の変化への対応をめざす。	37.7	33.5	23.3	5.5	71.2
4 生活リズムを生徒自ら管理する。	34.7	30.1	22.5	12.7	64.8
5 進学する大学の沿革や教育目標、学部の特性などを知り大学理解に努める。	23.7	33.1	30.1	13.1	56.8
6 大学4年間とその後に向けて生徒一人ひとりが目標を設定する。	31.8	33.1	22.9	12.3	64.8
7 学部や学科の専門性を超えて教養の涵養に努める。	32.6	38.1	20.8	8.5	70.8
III 入学前教育の実施内容として、次の1~5は適していますか。	1	2	3	4	1+2
1 ワークシート、問題集等を用いて高校教科・科目の復習をおこなう。	53.0	28.8	12.7	5.5	81.8
2 レポートの書き方についてテキストを読み、課題についてレポートを作成する。	51.7	33.5	11.4	3.4	85.2
3 学部・学科の教育内容に関連する課題図書を読み、感想文を書く。	34.7	37.7	20.3	7.2	72.5
4 学部・学科の教育内容に関連するテキストを読み、要約を作成する。	33.5	32.2	25.0	9.3	65.7
5 ワードプロソフト、表計算ソフトの基本的な操作ができる。	31.5	36.2	20.4	11.9	67.7
IV 初年次教育の必要性について、次の1、2はいかがですか。	1	2	3	4	1+2
1 18歳人口減少、大学全入化の進展もあり、初年次教育がますます必要になる。	54.4	31.6	9.3	4.6	86.1
2 初年次教育の一環として、高校までの学習内容を振り返る授業があるとよい。	31.6	26.6	27.4	14.3	58.2
V 初年次教育に期待される効果について、次の1~8はいかがですか。	1	2	3	4	1+2
1 学習習慣、学習意欲の維持、向上に努める。	47.5	31.4	12.7	8.5	78.8
2 高校までの学習内容について弱いところを補強する。	35.2	34.3	22.5	8.1	69.5
3 大学での学習形態やスタディスキルを身につける。	51.7	39.4	6.8	2.1	91.1
4 生活リズムを学生自ら管理する。	31.4	38.6	20.3	9.7	69.9
5 入学した大学の沿革や教育目標、学部・学科の特性をきちんと認識する。	29.2	40.7	22.9	7.2	69.9
6 大学4年間とその後に向けて学生一人ひとりが目標を設定する。	40.7	37.3	16.5	5.5	78.0
7 学部や学科の専門性を超えて教養の涵養に努める。	39.8	42.4	13.6	4.2	82.2
8 コミュニケーション力を高める。	35.7	40.0	17.0	7.2	75.7
VI 初年次教育の実施内容として、次の1~5は適していますか。	1	2	3	4	1+2
1 高校の教科・科目の復習をおこない弱点を補強する。	35.6	30.9	21.2	12.3	66.5
2 資料収集の方法やレポートの書き方を身につける。	65.3	31.4	2.5	0.8	96.6
3 学科の専門教育内容に関連する図書を読み、感想を書く。	39.8	38.6	17.4	4.2	78.4
4 学科の専門教育内容に関連するテキストを読み、要約を作成する。	41.5	41.1	12.7	4.7	82.6
5 Word、Excel、Power Pointの基本的な操作を身につける。	44.5	36.4	13.1	5.9	80.9

次号では、入学前教育、初年次教育に係る高校の先生方の意識など、質問紙回答状況から見てきたことを報告します。また、進路担当の先生方を対象とした調査結果、さらに大学入試改革への対応等について校長から聞き取った事項について報告します。

【連載】アクティブ・ラーニングの手法：第1回 ジグソー法

「アクティブ・ラーニング」という言葉は2012年の文部科学省『質的転換答申』で登場し、翌2013年の第二期教育振興基本計画では国策として推進することが明記されました。政策的に求められる課題ではありますが、それ以上に、授業において学生の主体性や学習を促進する手法として重要なのは事実です。

本号より、皆さんの授業で役に立ちそうな、アクティブ・ラーニングの手法を少しずつ紹介していきます。

「ジグソー法」って何？：

アクティブ・ラーニングの効果的な手法として注目される「ジグソー法」は、米国の社会心理学者、エリオット・アロンソンにより1970年代に提唱されました。アロンソンは、学校で普遍化している競争原理に基づく学習の考え方を憂い、他者との相談や協働に基づく学習が学習者のみならず社会全体の利益になると考えていました。米国という多様な民族・社会階層を持つ文化の中で、子ども達が学習参加と知識の構築と交換を通し、相互理解と融和を図りつつ学力・パーソナリティを高める学習法として、その文化的背景と時代的背景も反映され考案されたのが「ジグソー法」です。そのため、初等・中等教育を中心に実践されてきた経緯があります。

どうやって進めるの？：

ジグソー法では概略、以下のような手続で学習を進めます：①はじめに3～4人で構成したグループ（ジグソーグループ）を構成する。②大きな一つのテーマを3～4の小テーマに分ける。③一人ひとりが小テーマ一つを分担する（ジグソーパズルを一つひとつのピースに分ける要領）。④分担した小テーマごとにグループ（エキスパートグループ）を構成し、割り当てられたテーマのエキスパートになるべく理解を深める。⑤初めのグループ（ジグソーグループ）に再集合し、分担した小テーマについてそのエキスパートが説明、全体の理解に向かう。

「ジグソー法」って有効なの？：「ジグソー法」の効用は、以下の三点に要約できます。①学生が積極性をもって学習に参加できること。②仲間と協力・協働して知識を理解するのみならず、人としてお互いの理解が図れること。③各々が小テーマの責任者となることで、集団における責任感を醸成し成功体験を構築できることです。上述の『質的転換答申』において、学修者の「認知的、倫理的社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る」ことが重視され、アクティブ・ラーニングを志向した学習法が推奨されていますが、「ジグソー学習法」は昨今大学に求められている、このような能力を醸成するために効果的な学習法といえます。

授業ですぐに使えるの？：

実際に授業で「ジグソー法」を取り入れようとする、様々な課題が現れてきます。適用する教材、テーマや学習者集団に向き不向きがあり、とくに専門知識を取り扱う環境では、学生が持つ知識がある程度均されている必要があること。また、全学生が等しく積極性をもって学習課題に取り組むわけではないので、本来なら担保されるべき知識の構築と共有が妨げられ、社会性の醸成どころか孤立化を深める結果も導きかねないことなどです。

このような点を考慮しつつ演習科目やPBL科目に織り込むと効果が発揮されるように思います。

まとめ：

私たちは「アクティブ・ラーニング（AL）を考える」（『教育開発センターニュース』2016年9月）において、ALは「学生の学習の一形態」であり、「あくまで学習者の脳内で行われる活動の活発化をさし、教授方法の決まった『型』をもってALとするものではない」と示しました。上述したように、「ジグソー法」の授業への安易な導入には疑問があります。しかし、アロンソンは、「ジグソー法」は大学においてこそ真価を発揮するとも述べています。学生が主体的に、知識を多様な視点から多角的に理解し、次代を担う者として活用していく能力が高まることを期待し、授業をさらに豊かにする一方策として、「ジグソー法」の視点は価値あるものと考えています。

あとがき：今回は高大接続に関する活動を紹介しました。高校との関係は入試から「学びの接続」へと変化してきています。将来の入学生が高校で学んでいる内容とその学び方が10年前とは変化してきています。アクティブ・ラーニングに代表される「教育の質的転換」の動きは小中学校、高校と進み、その卒業生の大学入学が本格化してきます。高大接続については今後もFDやニュースで取りあげていく予定です。（所長 井上哲理）

* 問合せ先：教育開発センター（KAIT HALL 2F, edc@kait.jp） * バックナンバーはセンターホームページで。